

# クローズアップ NGO・NPO

認定NPO法人

レスキューストックヤード  
事務局長 浜田 ゆう

被災者に寄り添う、被災地から学ぶ。

## ■ 原点は阪神・淡路大震災

現在の代表理事、栗田暢之が阪神・淡路大震災時にボランティアとして被災地で活動し、被災者の無念さや生きづらさを目の当たりにし、そのことを伝えていくことが使命と感じたことが私たちの仕事の原点です。任意団体の「震災から学ぶボランティアネットの会」として出発し、2002年にはNPO法人化をしました。そして現在に至るまで強い理念を持って活動してきました。

## ■ レスキュー（助ける） ■ ストック（蓄える） ■ ヤード（場づくり）

1つ目のレスキューとは、災害が起きた現場へ駆けつけ、被災者を助ける活動のことを指しますが、助けるというより、「寄り添う」と言った方が



「足湯」を介して心をほぐし、知恵を学ぶ

じっくりします。被災者は、決まって「これまでに経験したことの無い災害だった」と言います。逆に言えば、それこそが「被災する」ということなのです。私たちは、避難所生活や自宅の片付けが、少しでも生活し易くなるような「手助け」をすることから始めます。

その後の「日常」を取り戻すための寄り添いも大切にしています。被災の段階は、急性期よりもむしろ回復期の方が長く続きます。そして、その時期の方が、私たちの役立つことが多いのです。被災者に寄り添うことを大切にし、被災者の生の声を聞くことが、次につながる学びであると知っているからです。

2つ目のストックとは、知恵を蓄えることと物資を蓄えることの2つの意味があります。知恵を蓄えるとは、被災者の声から学ぶことです。といっても、学術的な「調査」や「分析」ではありません。災害が起きる前に、同じ市民として、知恵を学び、苦労に学ぶということです。例えば、数値だけの記録や学術研究ではこぼれ落ちてしまう「記憶」ですが、民話という形で伝えられる内容が後世に残るように、私たちは民間であることの強みを活かして、知恵を蓄えます。一つの例として「足湯」が挙げられます。避難所の片隅で桶にお湯をはり、被災者に足をつけてもらい、ハンドマッサージする「場」を設けると、マッサージをしているボランティアと被災者の間に自然と会話が生まれ、その中に多くの知恵が含まれているものなのです。

もう一つの「蓄える」は、資器材や物資を蓄え

ることです。阪神・淡路大震災のボランティア元年以来、災害が起きたらボランティアがやってくるのが当たり前になりました。これは、日本人が、助けに行きたい気持ちを行動に移すようになったということ、とてもすばらしい変化です。しかし、人手があっても、道具が無ければ、活動できません。幸いにも、私たちは名古屋市所有の災害ボランティア活動用の資器材の管理を任せられていて、全国の被災地への貸し出しができるのです。この名古屋市との連携については、後述します。近年、私たちが全国に資器材を送っていることが知られるようになり、被災地（主に、当事者である市町村の社会福祉協議会）からの依頼が来るようになってきました。

回復期に活躍する「物資」もあります。例えば、仮設住宅での個別訪問の際、何かを持って訪問することで会話のきっかけが生まれる効果がありますが、その際「おみやげ」になる物を蓄えておくことも、大事だと思っています。その物資が、当事者にとっては、要らなくなったものであれば、更にリサイクルの効果も生まれます。

3つ目のヤードとは、災害が起きる前の防災・減災啓発の場づくりです。

災害から学び、被害を未然に防ぐための場づくりを行っています。例えば、地域の防災イベントの運営に携わることですが、近年は特に子ども向けのイベントに力を入れています。今夏には、宮城県に本拠地を置く劇団に名古屋で東日本大震災を題材にしたミュージカルを公演してもらい、宮



ボランティアのお姉さんとの炊き出し体験

城と名古屋の子ども達に笑顔を送る企画を進めています。

## ■ 自治体との協働 ■ ~災害が起きる前の備えのために~

自治体とは、さまざまな形で協働を行っています。特に私たちの事務所のある名古屋市は東海豪雨災害の反省から「名古屋市災害ボランティアコーディネーター養成講座」を10年以上続けています。災害が起きたときにボランティアを受け入れるためのコーディネーターを養成したい名古屋市の方針を受けて、私たちがその講座の企画、運営を行っています。2014年度は、ほかに愛知県、岐阜県の市町10か所以上から、防災に関する事業（避難所運営訓練、津波防災セミナーなど）の依頼をいただき、実施運営しました。

最も特徴的なのは、月1回「なごや災害ボランティア連絡会」という会です。名古屋市、名古屋市社会福祉協議会、名古屋市内16区すべてにある災害ボランティア団体とともにレスキューストックヤードも参加して情報交換の場を持っています。顔の見える関係は、災害が起きたときの機動力に直結します。その活動が評価され「中部の未来創造大賞」優秀賞をいただきました（2014年度）。

愛知県との協働事業も複数あります。例えば、水害ハザードマップ作りや避難行動訓練を行っています。また、愛知県主体の講習会「防災・減災カレッジ」（2014年度の参加者は延べ1,500人以上）の運営を担い、災害が起きる前の備える人材育成にも力を注いでいます。

## ■ 課題と抱負

阪神・淡路大震災でも、100%日常を取り戻せていない現実があり、ましてや、東日本大震災から4年では、私たちの寄り添いが必要なくなった被災地はありません。一方で、明日にも東海地域で起きる可能性のある巨大地震への備えも急がなければと考えると、やらなければならないことだらけです。とはいえ、目の前の一人をおろそかにしないことを肝に銘じて一步一步進んでいきたいと思えます。